

食養指導家 阿部 一理

札幌の自然食品「まほろば」  
店主 宮下周平さんの  
『続 倭詩』がスバラシイ!!!!!!  
百回は読みたい。  
本人曰く

「五百回は読んだかも。」

読めば読むほど味わい深く、一話一話  
ごとに心地良い衝撃を受けて思索する。  
二十九話を読み終えるのが惜しい。  
愛らしい気持ちが溢れる。  
何度涙したことか。そして貴重な写真が、  
実に数多く随所に散りばめられています。

# 続 倭詩



世界中の大きな事件や革命、戦争は計画通りに起きていると言ういわゆる「都市伝説」がある。すると第三次世界大戦は、もう既に始まっているのか？

人種、宗教、国家、富める者と貧しき者との対立が益々激しさを増している。

その対立を煽られ、人類は滅亡へと突き進み、戻る道はないかの様である。

そんな折の『続 倭詩』である。  
209頁『アリランと倭し美し』  
この一話だけでも一刻も早く日韓両国民に読んでもらいたい。

「……先ず両国が歴史の淵源を学び、お互いに国造りに協力を惜しまなかった古代に遡り、歩を並べて行くことが第一義ではなからうか。そこを突き破ってこそ、両国の新しき夜明けは来るものを信ずる。」

衝撃の歴史的明証を知らされた。  
彼の「アリラン」の詞は、倭健命の望郷の詩に通じていたとは……。

まほろばたより  
No.4450 17-033 3/3

# アリランと倭し美し

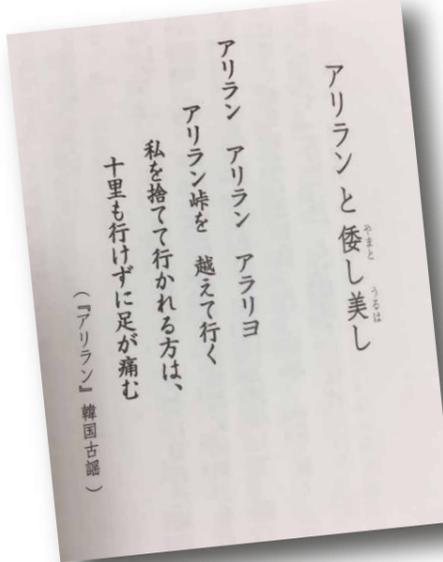
余談ですが、私の長男は弥真人と言います。そして「倭」の文字は、「イ」に「委ねる」と書きます。「ユダヤ人」の意味ではないかと40年程前から思っていました。

そして「矢と的」で「やまと」です。これは男と女を「矢と的」で表し、陽と陰であります。

若い時に食養の会を主宰していた時の会の名称が「ヤマト食養友の会」でした。

陰と陽も、男と女も、西洋と東洋も、物質文明と精神文明も、見えるモノと見えないモノも、表も裏も、明と暗も、生も死も、対立するものではなく、お互いがお互いを存在たらしめるモノであります。

『和する』が目標になく原点と気づかされます。深いところで人類に希望の灯をともしてくれれます。



歌手大貫妙子さんの、推薦の言葉『覚悟』は重い。

236頁 父君 大貫健一郎氏の『散華の海、帰郷の山』は涙無くしては読めなかった。

2011年90歳でお亡くなりになるまで、戦争の理不尽さを自身の体験を通して訴え続けていたそうです。日本中、いや世界中の人に読んで欲しい。

沖縄特攻に駆り出された大貫氏は、知覧から出撃し、敵機グラマンにタンクを撃ち抜かれたが、間一髪、何故か徳之島に不時着出来た。そして、機体からおりた刹那、爆撃で炎上。命からがら喜界島で、救護機に仲間と乗るはずだったがくじ引きで外れ、先に行く搭乗員を夜間に見送った。

すると突然上昇した機体は、待ち構えていた敵機に空中爆破された。二度、命拾いした。運命は定められていたのか。その時夜空の彼方に『健一郎、どんなことがあっても死んではいけません。』と母上の御声を聞いたと言う。

特攻を志願するも死ねない運命もある。そんな学徒兵の中、陸軍特攻隊では、何と1276中 605名、約半数が帰還したと言う。

驚くべき事実を誰が知ろう。その多くが隔離所に送り込まれ、大貫少尉は福岡「振武寮」に、生きて帰って来た。労の一言があっても良かった。出迎えの微笑があっても良かった。

# 続 倭詩

# 散華の海 帰郷の山

だが、軍参謀の一声「貴様らは、命が惜しい卑怯者、帝国軍人の面汚し。」と罵倒され、足腰の立たない程の暴力を浴びせられ、座敷牢に幽閉された。

その「許されざる帰還」特攻隊が生き残っている事は、軍部の恥、国辱だった。死せし軍神を、国賊としてひた隠しにしたのであった。

それよりも「最後の一機で必ず、俺も突入する。」と、隊員を鼓舞して死出の旅路に送り出した、この狂気の作戦を発令した大軍司令官は、戦後復讐を恐れ警護の拳銃を身に隠しつつ自決もできず、遂に95歳まで生き延びた。

草葉の陰で、南海に散華していった若き蕾は何を思うか。

犠牲と言うには、余りにも虚しく、愚かしい。何時の世も、何処の地も、一部上層部の判断が、国民の命運を左右する。

この沖縄決戦に陸海空四千機が出撃し、九割五分が途中、対空砲火で撃墜され、古くお粗末な機体は目標にさえ届かず海没した。それに比し、沈没損傷した米国の軍艦など、一割にも満たなかった。

勝敗は、既に決していた。

